



家内が「奇跡の天使様」に入信したと知ったのは、家族での夕食時に家内自身がニコニコしてそう言ったからで、私はおおいに驚いて、しかし口論になる可能性もたぶんにあるなどその場では何も言わず、なんちゅうことをするのだと怒り出したのは午後9時をまわって二人の子供が寝てからのことだった。

家内は、あら、だって怪しい宗教じゃないのよと平然としてやはりニコニコしているので、私は、目一杯怪しいじゃないか、すぐに辞めてくれと言ったのだが、家内は言うことを聞く様子もなく、ああらだって信仰は大切よなどと言う。

私自身は全くの無宗教であって、一応家としては親の代からの曹洞宗で、その檀家ではあるらしく、広島寺から時々妙な薄い冊子のようなものを送ってきて、それで年間二千元ほど請求されて、また、墓の掃除代だとして時に二万円請求されたりもして、その都度苦々しくは思うもののまあそのくらいは仕方がないかとおとなしく払ってはいるが、それ以上宗教に関わるつもりはなく、だから例えばキリスト教やら仏教やら名の知れた宗教ですら深入りはするつもりなどさらさらなく、ましてやそんな「奇跡の天使様」などという見たことも聞いたこともないような宗教など、はなから詐欺師だとしか思えないのである。

私の家内だとてそこら辺の考え方は私と同じであると私は疑いもなく思い込んでいたから、よもや家内がそんなことを言い出すとは夢にも思っておらなんだ。なんだか家内は突発的に精神に異常をきたしたのではあるまいかと薄気味悪くさえあったのである。

それでいくら取られたんだ、と私は家内がとんでもない額を言い出すんじゃあるまいかと内心ビクビクしながら問いただしたところが、月に千円だと言う。

私は幾分ホッとしながら、しかしそうやって初めはうまいことを言いながら、やがてツボだのなんだの御利益があると馬鹿高い品物を買わせるつもりなんだと分かりきっていることだから、今すぐ辞めなさい。明日行って辞めて来なさい。いや、もう行くな、行かんでおけ、ほったらかしておいていい、二度と行っちゃイカン。そう言うと、家内はそれでもニコニコしながら、しかしイヤだと言う。

誰がなんと言おうが私は行くのだと言う。それから口を酸っぱくして脅したりすかしたり、散々説教したが、家内はどうしても言うことを聞かない。私は行くのだとの一点張りである。

それではなんのご利益があるのかと聞くと、信仰は無欲でないといかんとぬかす。私は忌々しくて腹立たしくて馬鹿馬鹿しくて、なんで我が家がこんな災難に見舞われなければならないのか、もううんざりしてその夜はうまく眠れなんだ。

次の日、家内が早速外出の用意をし始めたからどこに行くんだと聞くと教会に行くんだなどと言う。

さっさと行こうとしていくら止めても言うことを聞かないから、こうなればしょうがない。私も一緒に出かけることにした。もうその奇跡のなんとやらと直談判するつもりである。

外は春。気持ちよく日が照ってほんわか暖かい天気がムシャクシャしている私にはそれもなんだか逆にいまいまして、妻にくっついてその教会なるものに行ってみるとそれは意外にも住宅街の普通の民家で、どこにでもあるような建て売りの二階建てであったのでむしろ驚いた。

玄関もごく普通で、唯一縦長の木の看板が掛かっているのが普通ではない。いっそお寺や教会に似せて宗教宗教していた方がいっそましに思えて、こんなところにもケチリやがるか、いよいよもって忌々しい。

奇跡の天使

そうしてその看板の下には小さく山辺と表札がかかっていた。家内がインターフォンを押すと、ハイ？と不機嫌そうなキイキイ声である。

家内が竹中デース、と嬉しそうに返事をすると、どうぞ、とまことにぶっきらぼうな口調で、しかしそれでも家内はニコニコしてるのである。

いったい家内は子持ちの主婦の見本を絵に描いたような性格で平素からその言動には厚かましさと強引さ、したたかさや残酷さ、それはそれは恐るべきものがあり、新聞の勧誘などいきなり知るか！と怒鳴りあげたり最近しょっちゅうかかってくるマンション購入の電話とか、学習教材のなんとかかんとかの電話とか、この馬鹿野郎とののしって電話を切ったり、私としては頼もしくはあるのだが、はたで聞いているとなんだかふと相手が可哀想になるほど強力なものがあり、その家内がこんなにニコニコしているのは初めて見た。

確かに宗教の威力恐るべしである。普段家庭でこんなにやさしくニコニコしてくれていたらさぞかし家庭円満、家族の団らん楽しかろうとは思っているのだが、それが何十万だかのツボとの交換となると、もう冗談ではない。そんなことは言っていられないのである。

家内は勝手に玄関のドアを開けると、そのままずかずか家の中に入って行く。あわてて私も後に続くと、家の中はやっぱり普通の民家と変わりやしない。

上がり口にゴルフバックまでおいてある。ちっとも宗教しとらんじゃないか。家内は靴を脱ぐと、なんだか慣れている風で平気で応接間とおぼしき部屋に入ってしまった。これは相当深くはまっているなあ、何度もここに足を運んでいるに違いないと、私は憂慮の念にかられながらその部屋に入った。

はたしてその応接室に入って最初に目に飛び込んだのが、天使の像であった。丁度等身大で真っ白なこれは石膏なのだろうか、なんかで写真を見たことがある、ミケランジェロのダビデみたいに彫りの深い端正な顔立ちに筋肉隆々たる体が続いていて、背中の肩胛骨のあたりから半ば折りたたまれた白鳥のような翼が生えている。

腰には布が巻いてありこれも真っ白なのだが、全体として石膏像というよりはよく見る大道芸人みたいに本物の人間を白く塗っているみたいに見えるから不気味だ。そうしてその天使の像が応接室の真ん中の空中でゆっくりと回転しているのだ。別にピアノ線も何も見あたらないがどうやって空中に浮かんで回転させているのだろう。

家内はソファに腰掛けている。私もその隣に腰をかけて、しかし気になるものだからじっとその天使の像を見ていた。妻はもう慣れているのか全然天使の像には目をくれず、まっすぐ前を見たままだ。

五分ほど待たされてから、やがて背の低い男が入ってきた。やけに頭が丸くて、首が短く真っ黒な髪の毛を真ん中から分けてピツタリとポマードで固めてあるからああこれは確かバレンチノカットとかいうやつじゃなかったろうか。目が大きくて黒目が茶色っぽい。鼻は小さいんだけどその代わりというわけでもなかろうがピノキオみたいに尖っている。

男は家内の他に私までいるものだから、ドキリと驚いた様子で、しかし不機嫌そうに口をへの字にした。

「この人は？」

男が家内に聞いた。

「主人です」

「ああ、そう」

それから男は山辺ですとキイキイ声で私に挨拶した。やっぱり不機嫌であるが、私だって不機嫌ならば負けないわい。誰が挨拶などしてやるものか。いきなりとちめてやろう。

「人の女房をみょうちくりんな宗教に引きずりこまんでいただきたい」

「ボクは別にそんなことしとらんです」

「現にしてるじゃないか」

「ご自分から入られたのですから」

頭に来た。

「変な説教でもしたんだろう。洗脳ってやつだろう」

「そんなことしとらんです」

「押し問答である。とにかく今すぐ家内を辞めさせて貰いたい」

「いいですよ」

山辺があっさりそういうのでちょっと拍子抜けはしたけれども、じゃ帰ると言って、私は家内に帰るぞと促したところが、家内はあろうことかイヤだと言う。

いいから帰るぞと言っても、絶対イヤだと言う。やはりこれが洗脳というものなのだろう、腕を引っ張っても引っ張ってもいっかなソファから腰を上げようとしな。どうしようもなくなってしまった。

山辺はよっぽど自信があるのだろう、不機嫌そうにソファに腰掛けたままである。仕方がないから私もいったんソファにかけ直した。三人黙ってソファに腰掛けたままである。山辺は不機嫌である。私は怒っている。家内はニコニコしている。そのまま時間だけが過ぎていく。

「ご主人もああ言ってるんですから帰ったらどうですか」

もううんざりだという感じで山辺がそう言ったので、私もここぞとそうだそうだと相打ちを打ったのであるが、しかし、山辺自身がそう言うのは絶対の自信に裏打ちされた余裕のなせるものなのか、私の怒りに反省したのか、とにかく山辺と私が二人して家内に帰宅を説得するという奇妙な構図ができあがってしまった。それでも家内は同意しない。私も疲れてきた。

「で、なにかね、こんなもん拜んでるんか？」

私が天使の像を指さすと、なぜだか山辺はハアアと深いため息をついて言った。

「あんたにも見えるんか？」

「見えるって何が？」

「ここに何が見える？」

「気色の悪い天使の像があるよ」

すると山辺はムーツと唸って、今度は額を押さえて俯いてしまった。

「どうしたんか？」

「普通見えないんだよね」

「何が？」

「だから天使が」

そら来たと思つた。だいたい敵の手の内は見えてきた。この天使が見えるのは選ばれた者だけで、信仰厚い人間に限られるんで、それが見えるからには私は選ばれた人間であるわけで、だから入信して天使をあげめ奉らねばならないとか、そんな理屈を言い出すのに違いない。実に、と考えているといきなり私の横で家内がワッと泣き出した。

「どうして私には見えないのよう」

私は驚いた。家内はさめざめと泣くのである。

「見えないってこの天使の像がか？」

「なんにも見えないわよ、どうして貴方に見えて私がダメなのよ」

そうして家内は信仰厚い自分が見えない天使様が信仰のかけらもない貴方に見えるのはおかしいと私を非難するし、山辺は山辺でだから普通見えないと言ってるじゃないかと唸るものだから、それではあんたは見えるのかと山辺に聞けば、見えますよ、だから困ってるんですよなどと言う。

私はなんだか混乱してきた。しかしさて、ふと考えるに逆の暗示ということもありえるな、つまり山辺は最初私の家内に天使の像が見えないという風に暗示をかけたのだ。そして信仰を続ければその暗示を解いて、天使の像が見えるように元に戻すのに違いない。そうして信仰の尊さを説いてから、ツボ、そうに決まった。

「あんたは家内に天使の像が見えないような暗示だか催眠術だか、洗脳だかしたんだろう」

「誰がそんなことするもんですか」

山辺は吐き捨てるようにそう言うのである。

「だいたいがボクだって好きでこんなことしてるわけじゃあないんだから」

それは聞き捨てならない。だったらとっととやめればいいじゃないか。なんでこんなことを続けているのか、と問うと、山辺が言うには、多分これは奇跡というものだろうからだと言うのである。

「ある日ね、十年ほど前、ボク、見えちゃったのね、この天使が。突然、脈略もなく、驚きましたよ、そりゃ。ボク別にクリスチャンでもないし、宗教に興味ないし。

最初は誰かのイタズラかと思ったんですがね。しかしこの通り何の仕掛けもなく空中に浮かんでるんですね」

そう言って山辺は天使の像の下側や、応接セットの机に立って、その上を手で払ったが、確かにピアノ線やらなんかの支えはないようだ。天使の像は何の仕掛けもなく空中に浮かんでゆっくりと回転しているのである。

それから山辺は天使の像に手を伸ばした。するとその手は手首のところまですっぽりと天使の像の中に飲み込まれてしまった。驚いて見ていると、引っこ抜かれた腕にはちゃんと手首がついている。啞然としていると山辺は言葉を継いだ。

「それで次にはボク幻覚みてるんじゃないかと思ひましてね、精神科に行っただですが、特に悪いところはないと言われてまして、そうなるこれはもう信じるしかなくなったのですね。

それでも不思議は不思議なんで、何人か知り合いを家に呼びまして、応接室に通したです。するとどうやら見える人と見えない人があるらしい。

見える人は滅多にはいないですが、しかし見える人は、皆これは奇跡でないかという話しになって、これはなんかカミサマの深い深い意志、メッセージなんかもしれんから、ありがたく奉って、人々に公開すべきであると言われてまして、それでボク無理矢理その人たちから玄関に『奇跡の天使』と看板かけさせられたです。

それでも最初のうちは自分でもカミサマのお告げかもしれんと思ったのですね。だって天使ですよ。天使が見えるんですから。だからまあ、無理矢理というのは言い過ぎかもしれませんが」

山辺は懽然として言葉を切った。

どうも嘘をついている風にも見えないのだが、しかし詐欺師というものはこのくらいの芝居は打つのももしれないとも思えて、それでも私自身にも天使は見えているものだから、どう考えていいのか私自身わからなくなってきた。

例えばこの私がなんだかだまくらかされて天使が見えているということもないではない。しかしそんな暗示をかけられた記憶も無いし、すると、本当に自分が選ばれた人間で、山辺と同じく実際に天使が見えるのももしれない。なんだか恐れ多いような怖いような不安なような気もしてくる。

「それで、なんかご利益でもありましたか？」

いつのまにか私は敬語になっていた。

「なーんにも無いです。むしろ信者がどやどや来るようになって迷惑ですな」

すると今まで泣いていた家内が、もうどうやら号泣もすすり泣きにまで落ち着いてはいたのだが、

「信仰は無欲なものなのよ。自分自身の内面の問題なのよ」

と、口を挟んできた。

「鼻水が垂れてますよ」

山辺が冷静にそう言うものだから、家内は慌てて鼻を拭いた。

はてさてまたも三者膠着状態に陥ってしまったようである。家内は天使様が見えないとシクシク泣いてはいるが、しかしこの場合見える方が不思議であるので、逆に家内が一番まともであるようにも思われる。

山辺も見えると言うがむしろそれが迷惑な様子で、しかしその様子をもって私は幾分か山辺への警戒を緩めたわけであるから、これは私を信用させる巧妙な手口なのかもしれない、本当は見えていないということもあり得るからちょっと信用しがたいものもある。

そうして肝心の私であるが、確かに天使は見える。それは山辺に会う前から見えていたのであるし、この家に来てから応接間に入るまで、特に暗示や洗脳らしき行為もなかったし、自分としては本当に見えてしまっているような気はする。ということはもし山辺の言い分が嘘だとすると、本当に天使が見えるのは私だけということになるので、もしそうであればと考えると、これがどうにも落ち着かないものがあるのだ。

なんとなれば、見えるのが他の何者でもなく天使だということが気にかかるので、キリストの12使徒の中には確かパウロという名前ではなかったか、そもそもはキリスト教の迫害者でありながら、ある日突然道ばたで天の啓示を受けてキリスト教に改宗したという人物がいたように覚えているのだが、状況はそれに酷似しているようにも思われ、それこそ山辺の言ったようにカミサマのお告げではないかしらんという気がしてきて、自分が選ばれて何かカミサマのための責務を負ったように感じてしまうのだ。

私はカミサマのために何事かをしなければならないのではなかろうか。

それでは私は何をすべきなのだろうか。

しかしそもそも第一に私がカミサマを信じているのかどうかとなると、これが現に天使を見ているにも関わらず、はなはだ怪しいものがあるので、パウロのように一発で改宗したかといえ、そんなものは全然無いのであるからカミサマも人選を誤ったとしか思えない。

なぜに家内が言ったように信心深い家内には見えなくて、何の信仰もない自分に見えるのか、カミサマの思し召しは人智を超えるものありとでも理解するべきなのだろうか。

そこで私はふと山辺の場合を考えた。果たして山辺が自分で言うように本当に天使が見えていたならば、彼はそれをどう考えたのであろうか。それは確か十年ほど前と聞いた。そうして今はうんざりしている様子である。

「貴方確かさっき十年くらい前に見えたと言いましたよね？」

「ですよ」

「それで今みたいに布教活動してるわけでしょう。実際天使の像が見えたときどう考えたのですかね。そうして何で今そんなに機嫌悪いのですか？」

すると山辺は今までの鬱憤を晴らす相手ができたと考えたのか、極めて熱心に話し始めたのである。

「前にも言ったようにですね、やっぱり奇跡ではないかという話になりまして、しかしボク自身は全く宗教なんて無関心でしたからね、なんでボクに見えるんか、相当考え込んだわけですよ。

でも結局はわからない。わからないんだけど周囲は騒ぐし、ボクも見えた以上、それは確かに奇跡ではあろうから、そのことをみんなに周知せしめる義務があるのではないかという良心の呵責を感じまして、そうして今のように一応我が家を教会としてささやかながら布教を始めたのですが、当の自分は信じていないわけで、それは信じようと努力はしたんですが、どうにもうまくいかない。

信者のみんなはそれは熱心に信心しているわけですから、自分としては罪悪感みたいな自責の念を覚えざるを得なかったのです。自分の行為に偽善を感じていたわけです。

しかしそれが偽善であろうがあるまいが、信者は集まってくるし、天使が現れたのが私の家でしょ。なんだか私が教祖様みたいな扱いを受ける。そうして奇跡だかなんだかしらないが天使の像はやはりそこにあり、しかしだからといって何か御利益でもあるかと言えば、そんなものはひとつもないのですね。

ただ天使の像が見える、それだけの話です。だったら奇跡なんてものは例えそれが本当だとしたところで、何の役にも立たないじゃあないですか。信者の人たちはありがたがっているようですが、自分には何がありがたいのか理解に苦しむのです。

しかしボクは信者の方々を軽蔑しているわけではないのです。たぶんボクは信者の人たちに嫉妬を感じているのです。信じることができるということは幸福です。信じる者は救われるということは本当のことだと思っているのです」

彼の熱弁は嘘とは思えず、私はいたく感じ入ったのであった。そうしてそれまで馬鹿者扱いしていた家内の言動にも、なにかしらの真理を見いだした気がして、頭ごなしに罵倒することもないかもしれぬ、いや、どちらかという幸福を追い求めるといった観点からすればそれはそれでいいようにも思えてきたのだから不思議である。

不思議と言えば何より不思議なのは、家内の信心で、さきに述べたようによく見かける通常の宗教への勧誘くらいは逆に相手は無神論者に仕立て上げうるほどの強烈無慈悲な外交折衝術を身につけている家内が何故にこのような信心をするに至ったのであるか、これは実に不思議極まる出来事であるから聞いてみた。

「で、お前は何故故に信仰に走ったのかね」

すると、家内はまだ鼻をぐすぐす言わせながら、

「信仰は理屈じゃないわ」

「いや、だからそれじゃ、どうしてこの事知ったのかね」

「そんなの関係ないわ」

「関係は大いにあるな、どこでひっかかったんだ、普段のお前にも似合わんじゃないか」

「そりゃ私ですよ」

山辺が割り込んできた。

「私が家の前でビラ配りしてたら通りかかられたんです。で、そのまま入信」

「なんでまたそんなことを」

私は家内をなじったのだが、ようやく落ち着いて来たらしい家内は、平然と、

「なんでも、かんでも、それはカミサマの思し召しなのよ」

と再びニコニコを取り戻した様子である。

「だって、いつもなら怒鳴りあげて断っているじゃあないか」

「だから、カミサマの思し召しなのよ」

「なにがだ」

「なにもかもよ」

いったい家内が何を言っているのだから、もうてんで要領を得ないのである。従って、なぜ故に家内が信仰に至ったのであるか、皆目見当もつかない。

「だってお前天使が見えないんだろ」

「だから祈るのよ」

「わからんなあ」

実際わからない。わからないのだけれども、しかしふと考えれば、世間の信仰など案外皆そんなものなのかもしれない。およそ世に宗教なるものは星の数ほどあろうけど、そうしてそれらの宗教にはそれぞれその信ずるカミサマの存在についてなにやら論証があるのかもしれないが、しかし確たる証拠があってカミサマがおわしますと主張して回る信者など見たこともなく、総じて彼らはとにかく祈る、信じる。ただもうそれに尽きるのであって、それ以上の理屈など必要としていない。それでよろしい。本人は幸福なのである。

すると、折角左様に幸福の夢の境地にいるものを、はたに迷惑をかけるならばいざ知らず、何の害も及ぼさないのであるならば、わざわざこれ見よとばかりにつまらぬ現実を突きつけてその夢を叩き壊すのもいかなものかと思われて来るのだった。

ましてや今回家内はニコニコで、夫婦円満家庭団らん家内安全、言うことなんか一言もないのであるから、これでツボさえ買わないで済むのなら、なんで家内に信心をやめさせなければならぬのか、理由が一つも思い浮かばない。

ただ、だからと言って私が家内の信心を認めるのかと言えば、そこにははなはだ難しいものがあるので、何となれば例えばそこらの石ころを拾ってきて、それを拝んでありがたがっている人間がいたとすれば、それはもうちょっと引けるに違いないので、私の家内の場合はその石ころがカミサマに代わっただけの話にしか思えなくて、それを認めるのには私の理性が邪魔をする。

いったい人間というものは自分の理性が認めないものには反対するようにはできあがっているものらしく、いくらそれが害が無いからと言ってもおかしいものはおかしいとしか思えず、感情的に許せない最低の線引きがあるのであろう。

家内の信心ですらそんな具合であるから。ましてや、私自身がカミサマを認めるなどは論外の話で、それはいくら天使が見えようが、だいたいとその天使が見えるといったそのこと自体、それを事実として認めることに疑義を生じているくらいのところだから、はっきり言ってカミサマなど信じられようはずがない。そこいら辺山辺はどう考えているのだろう。そこで私は聞いてみた。

「私今現在でも果たして本当に天使が見えているのかどうか、錯覚とか暗示じゃないかとお出しでつまづいている状態なわけなんですけど、あなたの場合天使が見えていること自体は認めていて、しかしながらそれでも信仰にはつながらんわけでしょ。そりゃなんですかね。

「なんか天使が見えるということを実事として認めることができたんなら、それすなわち信仰に至るという気がするですがね」

「考えちゃうからなんでしょうね。悪い癖です。例えば世の中には天使の像なんかいくらでもあるでしょ。教会やらなんやらに石像とかなんか。だからといって、それを見た人がみんな即信心するかと言え、そんなことはないわけで、だったらそれら普通の天使の像とこの天使の像のどこが違ってるといえば、空中で回転してて、見える人と見えない人がいるって、ただそれだけですよ。

「だったら人と違って天使の像が見えるってことがなんで信仰の決め手になるのか、理屈で考えたら何の証明にもなっとらんじゃないですか」

「うーん。でもあなたこうして教会を作ったり、布教したりしてるじゃないですか」

「いや、だから『信じたい』とは思ってるんですね。つまり逆にカミサマなんかいない、と断言することもこれまた理屈じゃ不可能だと考えてるです。

「そうすると結局人間安易な方に逃げたがるようで、ボクの場合、万が一にも本当にカミサマがいるとなったら、この天使の像が見えているのに信心しないということでバチが当たるんじゃないかと、こう心配するわけですよ。だからボクの布教とかはその罰が当たらないようにという担保なんですね」

「むむ、つまるところ考えたら負けだと」

「考えてしまうと、もう後戻りできません。考えまいと思うと、その考えまいと考えている自分があるです。しかしこんな事を話し合ったのは久しぶりです。失礼ながらなんかあなたとは気が合うようで」

「私こそあなたのことを誤解していたようで」

「家内はその横で、アーベマリーイアーとか賛美歌を歌い出した。私と山辺はそんな家内をほったらかして、熱心な議論を戦わせていた。こんなに白熱した会話は久しぶりで、それは山辺も同じであつたらしく、二人は旧知の間柄でもあつたかのように興奮してしゃべりまくっていた。

その会話によるとそもそも山辺は普通の銀行員であつたらしい。世間的にはお堅い商売であるからまさか職場や取引先で天使が見えますなどと、そんなことを口走つたらどんなことになるのか、考えるだに恐ろしい。仕事と天使の狭間で相当煩悶したらしく、しかし結局前述のごとき行動を取るがために仕事は辞めてしまったとのことであり、それは三十代も半ばのことで、おかげさまでいまだに独身を通してのことであつた。

それは私にとってちょっと気色の悪い経験談であり、それはよもやまさかそのような展開が私の人生に降り懸かってくるならばそれはたまつたものでないからで、しかも仮にそうなれば私の場合夫婦そろつての信仰生活という事になるのでその場合私は教祖様でもないわけだからどこから収入を得ようというのだ。いや収入どころでなく寄付だかお布施だかしらないが出費がかさむ。せめて副教祖とか師範代とかそういう身分はないのだろうか、とどうにも気になって当初の意気込みから考えると思考の内容が妙な方向にそれていつてる気がしないでもなかつたのだが私は山辺にこう聞いた。

「それではその、そうですね、つまりぶっちゃけたハナシもうかるですか？」

「え？」

「いや、だからこう、十分な収入源となっているかどうかという」

「もうかるはずがないでしょうが。それどころか生活だって苦しいくらいです」

「ホントですか？」

「いやだから、そんな儲かつてたらここまで不機嫌でないですよ」

山辺が言うには本当にインチキ宗教を展開するつもりなどさらさらないのでから壺だのなんだの売っているわけでもなく、会費というのかなんかそんなものを取るといったってそれもなんだか気が引けるし、前にも言ったように好きでやっているわけでなし、やる気のないことはなはだしいのだが、しかしそれでは天使の見えるこの家の存続も怪しくなってくるから、そこをなんとかと言う信者の人たちの寄付をもってしのいでいるということであつた。

「実際今日は煙草を買おうか酒を買おうか、両方買うのはキツイなあと半日悩むことすらあるくらいです」

「そりゃちょっと、もう少し考えてもいいんじゃないですか。だって実際インチキというわけでもないというのでしょうか。宗教法人にだってできるでしょうし。聖書くらい売つたって罰は当たらないでしょうに」

「そう言われればそうかもしれんですね。商売にはしたくなかつたのですが、もうこうなると生活の問題ですしね。ああ、もう疲れた。天使饅頭でも売ってやろうかな」

「おお、それは夢がありますな。男のロマンというものです。いっそ私も一緒にしようかな。天使のブロマイドとか」

「だって写真にも写りませんですもの」

「見える人にしか見えないとか言って」

「そこまでするとほとんど詐欺まがいですね」

「いや、真正の詐欺でしょう。天使だけに神聖とか言っちゃつて。」

「はははは」

「はっはっは」

なんだか肝胆相照らした気分で私と山辺は旧知の間柄のごとくにおよそ一時間にも渡ってしゃべりまくっていたのであった。

すると、

「たいがいにしとけよ、おのれらはっ！」

突然天使が大声で怒鳴りあげた。私と山辺は腰を抜かした。私は目ん玉が飛び出すかと思った。山辺との会話に夢中になって、つい肝心の天使の像の存在すら忘れていたのだ。

「さっきから聞いてりゃうだうだうだ下らんことばっか抜かしやがって、お前10年もおんなじ格好で回ってる俺の身にもなってみろ！10年だぞ！10年！」

天使は憤然として応接セットの机にあぐらをかくと、そこにあったシガレットケースからタバコを取って口にした。

「火！」

慌てて山辺がジッポのライターで火を着けた。その手がぶるぶる震えている。天使はこめかみにぴくぴく血管を浮かせながら、じゅうっと音がするほど一気にタバコを吸い込んで、プハーっと煙を吐き出した。

「これでも信じられんか、ああ？」

いや、信じる信じない以前にとにかく怖い。山辺と私は冷や汗をかきながら硬直しているばかりである。家内だけは、あら、タバコが宙に浮いて煙が出てる、信仰のおかげだわと、どうやらタバコと煙だけは見えている様子である。

「俺あ天使だから人間の考えてることなんざお見通しなんだがな、二人ともそれでモノを考えてるつもりだからちゃんちゃらおかしいや。こっちの女の方がよっぽどマシだわね。俺もう知らんもんね、好きにするさ。じゃね。」

そういうと天使はポイとタバコを投げ捨てると、羽をパタパタ羽ばたかせて、窓から飛んでいってしまった。私と山辺は呆然としたままその姿を見送るのみであった。たぶん生涯二度と天使の姿を見ることはできないのだろうと、再び歌い始めた家内の賛美歌を聞きながら私はそんな気がした。

ああ、私はいったい何をしていたのだろう。考えること、信仰に破る。

ちえっ。